

花王教員フェローシップ 報告レポート

アラスカのオットセイ



寝屋川市立桜小学校 蔵本 祥子

1、応募への思い

私は、大学で比較文化論について研究をしていた経験も手伝い、以前より青年海外協力隊や海外ボランティアに興味をもっていた。教職に就いてはいるが、いつか何らかの形で海外と関わりをもてないものかという思いが心のどこかにひっかかっていた。そんな時、私の友人が本プロジェクトに参加した話を聞き、“絶対自分も参加してみたい”という強い思いが、瞬時に私をとらえた。そこでまず私が取り組んだことは伊豆の深い森でフクロウの生態観察をするという、アースウオッチジャパンのプログラムに参加することだった。そこには、職業、年齢、地域は様々ではあるものの、自然を大切に思い、環境問題に関心のある方々ばかりが参加されていた。ここで、メンバーのみなさんや先生方のおかげですばらしい体験ができたことが、さらに教員フェローシップへの興味を高めることになったことは言うまでもない。

2、応募から参加へ

そんな思いを抱きながらも多忙な日々の中で応募の締め切り日は近づいてくる。“どうせ合格しないだろうし・・・”弱気な自分も見え隠れする毎日。しかしやはりチャレンジする前からあきらめたくないとの思いからなんとか提出。そんな慌しさのなかでの応募だったので、ほぼあきらめていたところ、合格の知らせをいただき正直驚いた。

それからは、提出書類や予防接種、航空機手配、そして分厚い英語のブリーフィング・・・と、準備することは山ほどあったが、不安や疑問はその都度ご一緒することになった直木先生とメールで相談し合いながら、仕事の合間を見つけては少しずつ進めていった。本プログラムに日本人が初めて参加することもあり、情報量も限られていたので、アースウオッチのスタッフの皆さんに随分助けて頂いたことは本当にありがたく、感謝している。

直木先生が大阪の方で、一度お会いすることができたので、アラスカへのおみやげや、現地へ持参する日本食などを分担した。また、ブリーフィングを持ち寄って最終確認をし、アンカレッジでの再会を約束した。携帯電話もない何千キロも離れた異国で果たしてうまく会うことができるのか・・・。しかし不思議と不安より期待感が勝っていたことを覚えている。

3、アンカレッジへ

8月3日、関空からまずはサンフランシスコへ約10時間のフライト。次のアンカレッジへの出発までに半日ある。本を読んだり、コーヒーをのんだり・・・一人でいくだけでも楽しく過ごすこ

とができる。これは私の唯一の特技なのかもしれないとこの時再確認する。しかしもちろん安全な都会の空港だからということをおぼえてはいけないうと自分に言い聞かせながら、びっくりするほど甘くて大きいドーナツをほおぼる。

夜中1：40にアンカレッジ着。空港近くのホテルを日本から予約していたのでシャトルバスが来てくれていた。日本の初春ぐらいの気持ちいい気温だった。島へ渡る前の荷物の整理や、足りないものを買揃える最後のチャンスだと思いつつ、街へ出て小さな双眼鏡を購入。それと、日本からだとかさばるので、ここでしっかりしたゴム長靴を買った。これがその後非常に役立った。アンカレッジの街はアウトドアショップやデパートもあり日本で買い忘れたものなどはほおぼ買揃えることができる。

たよりない英語でホテルのフロントにメッセージを残しながら、夜、直木先生と再会することができた。食事しながら明日のフライトについて打ち合わせる。夜11時頃まで明るく、時差ぼけもあり、なんとも体内時計がおかしい。肌寒く常にゴアテックス着用。しかし明日はいよいよセントジョージ島へ出発だ！！

8月5日、10：00、空港のペンエアーカウンターでチェックイン。もう一人のメンバーのスーザンさんと出会う。12：00発とあるが堂々と遅れ、何のアナウンスもない。それに対して待合室にいる他の乗客も何の反応もない。時間が気になってしかたがない私は、自分は日々分刻みで動いているからだろうと思った。12：30発。バスより小さい20人乗りぐらいの飛行機で、搭乗時に耳栓を配られたのが印象的であった。

いよいよかと思ってもなかなか着陸しない。それはなぜか……。濃霧のため着陸できず、アンカレッジに戻っていたからであった。アンカレッジ着pm9：30。次のフライトは明後日の同時刻までないという……。



アンカレッジ この明るさでpm11：00



ペンエアーのカウンター
一人のご婦人が何から何までやってくれる。

4、セントジョージ島へ到着、調査開始

今回のフライトが成功しなかったら、もうあきらめて帰るとスーザンさんは言っていたので、無事着くことを心から願った8月7日。“活動の日数は少なくなってしまうけどぜひ来てください”とのコーディネーターさんの言葉がうれしかった。アンカレッジで1日をすごした後、無事セントジョージ島へ到着することができた時は本当にほっとした。空港にコーディネーターのカリンさんやライアンさんが迎えに来てくれていた。空港といっても、草原に滑走路とプレハブが

ひとつ。第一印象は本当に見渡す限りの草原で何にもないということだった。

その日の午後、研究者のブルース先生や、スティーブ先生と一緒にさっそくオットセイの繁殖地を見学に行く。高い崖の上にブラインドデッキが作ってあった。オットセイはとてもこわがりで驚きやすい。そしてすごく目もいいそうでなるべく刺激しないようにそのデッキの中から見学するようになっているということだった。もちろんデッキの外で見るときにも低い姿勢がいいそうだ。崖の上から見下ろすと数えきれないほどのオットセイがいた。大小、体色様々。水族館で見るオットセイとは違い、かなりたくましく強いにおいをはなっている。多数のオットセイが鳴き合う声は遠くからでも聞こえる、野太い唸りに似たものであった。この時点では繁殖地のしくみや、雄雌の見分けもつかなかったが、夜のミーティングでそれらはすべて秩序だって組織されていることを学んだ。また、明日からの調査に必要なオットセイたちの行動や動作をビデオで確認し、スーザンさんの提案で、それをボランティア3人でロールプレイングしながら復習したことがその後の調査にとっても役立った。

5、調査内容とオットセイたち

かつては世界の70%のオットセイがセントジョージ島を含むこのプリビロフ諸島に繁殖にやっていたのが、近年は激減している。その原因はもちろん色々考えられるが、そのひとつに次世代を築く子どもの生存率が低いことがあげられる。それは母親の子育てと深く関係していると考えられていて、私たちの仕事は、どのようにお母さんオットセイは子育てをしているのかということ年齢別に観察、記録することであった。

ハーレムを形成するビーチマスターとよばれるたった一頭の最強のオスは、周りに約10頭～20頭のメスを保有している。集団にもよるがだいたいひとつのハーレムの大きさは直径7～8mぐらいであろうか。初日崖の下に見た一見無造作にちらばっている多数のオットセイは、このいくつかのハーレムが集まってできていることがだんだん見えてきた。お母さんは各々一頭の赤ちゃんを産んで、このハーレムで子育てをしている。厳しい冬を乗り切るためには夏の間にとれだけエネルギーを蓄え、体重をふやしておくかにかかっているオットセイの子どもたち。しかし、泳ぎ方さえ知らない子どもたちは2、3日の間、お母さんが餌を運んでくれるのをひたすら待つしかない。私たちではほとんど見分けがつかないオットセイの子どもや母親であるが、海から戻ったお母さんと子どもは、決してわが子、わが母を間違わないのだそうだ。それは主に、におい、鳴き声などで認識できるらしい。海の栄養をたっぷり含んだ母乳が子どもたちのからだをつくり、命をつくる。おなかをすかせて母の帰りを待つ子どもは、たまに違うお母さんの母乳を飲もうとすることもあるのだが、そんな時、母親たちはせっかく苦労して蓄えた母乳を他の子どもに取られまいと威嚇したり、噛んだりして拒む。そんな行動もすべて記録用紙に時間と共にこまかく記していく。もちろん、わが子が母乳を飲むことや、それに対する母親の対応。飲ませる準備ができているかどうか、また、調査開始時に抽出した一組の母子の行動だけではなく、彼らを取り巻く周囲のオットセイに対する反応も同時に記録していく。2時間、その抽出母子を見失わないようにひたすら双眼鏡でおいかける。時計・記録係と観察係に分かれての作業である。作業は崖の上に立つ一畳ほどの小屋の中で行っていた。車が入れないので、毎日草原の丘を30分ほど登っていく。ここでアンカレッジで購入したゴム長靴が大活躍。ぬかるみ、でこぼこにも見

事に対応してくれていた。風が吹き付けるとかなり寒いので4枚ほど着込み、温かいお茶や、チョコレートを持参していた。



観察小屋から崖下を調査中。
くしゃみをしてる間に、
状況がかわってしまうことも
あるので目が離せない。



時刻と共に、細かく行動を記入していく観察シート



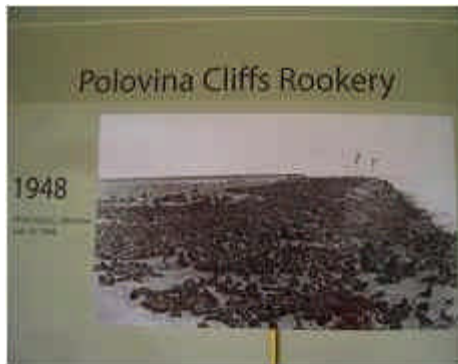
観察小屋から調査をするコーディネーター
のライアンさんとカメラを見ることもでき
ない

ブルース先生の専門分野である **Entanglement Seals** の研究もとても興味深いものがあった。**Entanglement Seals** とは海に浮遊している漁船などが使っていた網がからだに巻きついてしまったオットセイのことである。いろいろな資料などを見せてもらったが、からだに食い込み非常にむごい状態になっているものもいて、そのために死んでしまう場合も多い。私たちが調査を行っていた繁殖地とは別のところに、まだ若くハーレムを築けない雄や、もう繁殖活動から卒業したオットセイたちが集まっている群れがあるのだが、その中に新たに **Entanglement Seal** がいるとのことで、毎日立ち寄って双眼鏡で探した。たしかに一頭、首にオレンジの網が絡まっているオットセイを発見。ライアンさんが写真を撮りデータとして保存。そして、みんなで一度捕まえてはずしてやろうということになった。しかし、今回の期間中には捕獲の道具が故障中とのことでその作業はできなかった。上記したようにオットセイは人間に対しても、非常に注意深い動物であるが、以前網をはずすため捕獲をしようとした時に、とってほしそうに首を出してきたことがあるそうだ。それだけ苦しかったのだろう、敵ではないということが感覚的にわかったのかもしれない。私たちが見たオットセイをはじめ、今もなお多くの海獣たちがその人工的なゴミによって苦しんでいるのである。

あたりがうっすらと闇に包まれ出した夕食後、カリンさんから“祥子、シーカヤックにのったことある？”とのお誘い。正直、私の中に、“こんな夜に海に出て大丈夫なのかな・・・こないだ観察していたシャチにかぶられたりして・・・”という短絡的な不安もあったが早速直木先生と二人乗りのシーカヤックで海へ出た。そこに現れたオットセイたち。自由に泳ぎまわり、流線型のボディが次々と海に吸い込まれる。われわれのカヤックの下をくぐっていくものもいる。何百頭ものオットセイたちが遠くから近くから興味深げに私たちを見ていた。静かな海に泳ぐ、薄霧の中の彼らは本当に気高く美しい。この豊かな海の地球規模の時の流れの中で、繁殖活動を行い、命をつなぎ種を存続させてきたオットセイたち。そんな命のいとなみを脅かす要因を、同じ哺乳

類である私たちがつくっているのかもしれないと思ひ言葉を失ってしまった。

激減しているオットセイたち。絶滅の危険性もあるらしい。



流れ着いていた人工ゴミ。
海の生き物たちからむこともある。



ライアンさんからレクチャーをうける直木先生



シーカヤックで夜の海へ。この時感じた気持ちを
一生忘れたくない。 pm 9 : 00



北のガラパゴス セントジョージアイランド

6、「北のガラパゴス」プリビロフ諸島セントジョージ島

本島の島民は主にアリュート民族のみなさんで約100人。もともとロシア領だったこともあり、そのお名前や風貌に面影を残す。学校、食品スーパー、診療所、郵便局などが一つの村に集まっていて、そこだけで生活をしている。もちろん全員が知り合いで、どこで出会ってもみなさんが気さくに笑顔で声をかけてくれる。自然環境が厳しいこの島では、全員が協力し合って暮らすことがとても重要であることがよくわかる。人の暮らしにとって厳しい自然環境であるということは一方で、自然の宝庫であるということでもある。それゆえに、セントジョージ島は「北のガラパゴス」ともよばれ、多種多様な動植物、海洋生物が生息している。ここにはオットセイだけではなく、鳥類、シャチ、海草、その他の海獣など、世界中からさまざまな研究者が集まってくる。何人かの方々とお話をしたが、みなさんフレンドリーでわかりやすい英語でいねいに説明をしてくれた。



巣から小鳥を採取



小鳥の重さを計測する直木先生。
小鳥の成長を調査することによって、
海の栄養状態がわかるのだそうだ。

この島で行われている研究活動のすばらしさは、この島民のみなさんと、研究者の方々の協力体制の上になりたっているということである。村の集会場の地下には、オットセイやセイウチを観察しながらカメラの遠隔操作を行ったり、データを処理したり、様々な機材を保管したりするオフィスを構えている。私たちがいる時には、先生方と島の方々が、どうやら崖の上に備え付けてあるカメラが故障したので修理に行く話をしていて、そのためのコンクリートや、上っていくための強力四輪バギーの話をしていた。また、この島に興味をもった視察団が来られていて、集会場でコーディネーターのカリンさんや、地元の方々がセントジョージ島のプレゼンテーションをする昼食会も催されていた。

島の方々は自分たちの島を誇りに思い、守っていくための様々な取り組みをしている。そしてそこに世界中から様々な研究者が集まってくる。お互いがお互いの活動や暮らしを尊重し合い、大切に思うことが、結果的に有益なものを生み出していることが伝わってきた。そんな活動のなかに自分が少しでもボランティアとして参加できることをとても嬉しく思った。



←地元の方とカメラの
調子をチェックする
ブルース先生



視察団の方に島のプレゼン
テーションをしている
ところ→

7、異文化交流と村の子どもたち

毎日の調査をする中で、私たちボランティアと行動をともにしてくれたのはおもにコーディネーターのライアンさんだった。もともと鳥類の専門家だそうだが、とにかく生物や自然環境について詳しく、調査内容の説明や活動中も私たちをサポートしてくれた。直木先生は理科の先生なので、とりわけ話しがはずんでいて専門用語がとびかっていた。その後何度も私に説明をしてくれた。夜10時頃まで明るいこの島では夕食後も色々な活動ができる。直木先生はライアンさんや他の研究者の方からランニングに誘われ走りに行っていた。さすがに私は遠慮したが、その後も一緒にビデオをみたり、他の研究の話の話を聞いたり、とても有意義な時間を過ごすことができた。私たちも日本から持って行っていた折り紙や習字を紹介したり、ランチにお好み焼きやカレーを作って食べていただいたりした。そんな交流の中で“コミュニケーション”についても考えさせられることが多くあった。もちろん英語力というのはコミュニケーションに必須のツールである。期間中、何度もっと英語が話せたらと思ったことだろう。しかしいくら優秀なツールを持っていたとしても、伝えたいという強い思いや、話しかける勇気がないとそれは無意味である。また、この人は何を伝えたいのかな、理解したいなという思いがないと聞き取ることは難しい。コミュニケーションとはそのような相手を思いやる気持ちの上になり立っている。英語が苦手な私たちにもおもいやりをもって接してくれた、ライアンさんはじめスタッフのみなさんはそういう意味で、優秀なツールを併せ持つ、コミュニケーション上級者であったことに本当に感謝している。ひいてはそれが異文化交流のベースになることを強く感じた。



カリンさん手作りの
ピザパーティーと
私たちが作った
“ジャパニーズピザ”



島の子どもたちは小学生が12人と、中学生が4人、高校生の人数は確認できなかったが一緒に綱渡りをして遊んだ中に何人かいたと思う。学校はとても近代的な建物で、体育館や図書室も完備されている。図書館の本を入れ替えるためたくさん廃棄処分の本が出されており、もらってもいいということだったので何冊かいただき、郵便で日本へ送った。島には高校がないため、となりのセントポール島からの衛星中継による授業だそう。たまたま飛行機と一緒に乗り合わせた女性がセントジョージの小学校の先生だったので、学校を見学させてほしいとお願いすると快く了解してくれた。彼女はセントジョージ島の出身で、島をこよなく愛し大学を卒業後島に戻り、教師をしているそう。学校には子どもたちが取り組んでいる海洋調査の研究発表や、バスケットクラブの写真などが掲示してあり充実した教育活動がうかがえた。新しいパラポラアンテナの建設も進んでいるようだった。子どもたちはみんな人なつこくとてもかわいい。これは万国共通である。“なんかお手伝いしようか？いっしょにテレビ見ない？”と誘ってくれた3年生のコービーくん。(彼のお母さんが毎晩私たちのために、温かくておいしい夕食や、おやつを作ってくれていた。)日本からもっていったキャンディーをあげると、次の日“もう全部食べたよ”と言って

いた。袋ごとあげたので多分30個ぐらいはあったはずだが・・・。私は今3年生の担任をしているので、そんなエピソードも日本の子どもたちと同じだろうな思い、とてもほほえましく感じた。また、“日本から学校の先生が来てるからおいで”とカリンさんが呼んでくれた女の子たち。彼女は修学旅行で日本に来たことがあるらしく将来アニメーターになりたいと夢を語ってくれた。そういえば郵便局でみつけた“ピカチュウ”の落書き。日本から遠く離れた北のガラパゴスで出会うと思っていたいなかったが、それは彼女の作なのだそうだ。



セントジョージスクール



習字を楽しんでくれた島の女の子達。
みんなおしゃれでかわいい。奥に写っている
コーディネーターのカリンさんが呼んでくれた。



小学生の子どもたちの元気さは日本と同じ。

8、今後の教育活動へ

私が今回お会いした研究者のみなさんは、私が想像していたイメージとは程遠い姿だった。最前線で研究を進める彼らは、いつも泥だらけの長靴をはき、厳しい自然環境の中で活動している。だぶんこうだろうという仮説では科学ではない。なんらかの真実にたどりつくまでには、気の遠くなるような地道な作業と大量のデータを分析することが必要であることを感じた。先生方と話をする中で、日々の私たちの調査はそう意味でとても重要な作業であることを伝えてくれた。そしてブルース先生から、“そんな大変で、とても重要な作業に取り組んでくれてありがとう”という言葉をいただきとても恐縮してしまった。私こそそんな貴重な体験をさせてもらったことを心から感謝しているのである。私のつたない英語では感謝の気持ちを伝えることはままならないので、そのぶん、疑問点は細かくライアンさんに尋ね、直木先生と内容を確認し合いながら“絶対

間違った観察をしないぞ”と言う気持ちで調査に取り組んだ。

以前教員フェローとしてプログラムに参加した友人から“世界で経験し、地元で活動する”という言葉聞いた。貴重な体験をしてきたことを日々の暮らしや教育にどうかすのか。今、地球環境が急速に変化し続けていることは誰もが知っている。本校の子どもたちも“先生、今、白くまがおぼれてるらしいで”と私に言ってきたことがあった。しかしそれはテレビの中の遠い国で起きている自分たちとは関係がないことととらえているのが実情である。もちろん大阪の一都市にくらす私たちは、セントジョージ島で行われているような研究はできない。しかし、最前線での研究も実は本当に小さな努力の積み重ねであるように、私たちがこの町でできることも必ずある。今回の体験をもとに、“自分たちにできることは何なのか”を子どもたちと共に考える。そしてたとえたった一人の子どもであっても、この大きな地球のために役立つことができるんだということを伝えたい。同時に日本人であると同時に私たちは“地球人”であるという視点を発信していく。具体的には来年度、そんな情報を発信するクラブを立ち上げたいと計画中である。

本校は自然環境が極めてすくない都市部にあるため、子どもたちは自然と触れ合う機会がすくなく、自然が大切だと言葉では知っていても心で感じる経験が乏しい。そこで3年前から自然体験型の行事に取り組んでいて引き続き携わっていきたいと考えている。地球環境の大切さを言葉で伝えるだけではなく、自らで体験する感動こそが自然のかけがえのなさを感じ、慈しむ心を育むのだと思うからである。教育活動の中にそんな体験を織り交ぜながら、次世代を担う子どもたちが地球規模で自分たちのくらしを見つめていくことが、彼らが大人に成長した時になんらかの行動や活動へとつながっていくことを願う。

9、おわりに

本プログラム参加により、本当にたくさんのことを学ぶことができました。オットセイの調査や自然環境のことはもちろん、その背景にあるくらしや人としての思いやり、異文化理解の心。紙面では全てを表現することは難しいです。自分を振り返ることも何度もありました。

今回、このようなすばらしい機会を与えてくださった花王とアースウォッチの皆様、そしてご迷惑をかけしっぱなしだったスタッフの加藤様、また、現地スタッフやメンバー、島の皆様に心から感謝します。そして私のわがままを即時に受け入れてくださった校長先生はじめ同僚のみんな、このプロジェクトを紹介してくれた友人、また、プログラム前後にわたりお世話になった直木優一先生との出会いを本当にうれしく思い感謝しています。この皆様に対する感謝の気持ちを、これからも続くであろう教師生活において様々に子どもに還していきたいと思えます。本当にありがとうございました。